

思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーション活動が ピアカウンセラーへ及ぼす影響についての文献研究

畠山 美怜¹⁾, 笹野 京子²⁾, 長谷川 ともみ²⁾

1) 富山県済生会高岡病院 看護部

2) 富山大学大学院医学薬学研究部母性看護学

要 旨

本研究の目的は、本邦で1990年代から取り入れられている思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーション活動がピアカウンセラー自身に及ぼす影響を文献研究により明らかにすることである。医学中央雑誌をデータベースに2016年時点での全年で「ピアカウンセラー」「ピアエデュケーション」「ピアサポート」「思春期」をキーワードにして検索し得られた55件中、ピアカウンセラーへの影響が詳述されている質的研究7件を分析した。文献内容をブルームらの理論を活用したイリノイ大学医学教育開発センターから提案されている分類項目を用いて認知領域(想起, 解釈, 問題解決), 情意領域(受入れ, 反応, 内面化), 精神運動領域(模倣, コントロール, 自動化)の3領域3レベルにそれぞれ分類した。活動1回のみ文献では2領域の記述がみられるものの最終レベルには到達できていなかった。活動2回以上の文献ではほとんどの文献が3領域の全てにおいて最終レベルまで記述がみられた。これらのことから活動がピアカウンセラーに及ぼす影響としては事前の演習を基礎とし、2回以上の活動経験を通して知識, 価値観や技術において深化がみられることが示唆された。

キーワード

思春期, ピアカウンセリング, 文献研究

はじめに

我が国では、性行動の低年齢化・活発化により10代の人工妊娠中絶^{1,2)}及びクラミジアをはじめとした性感染症の急増がみられていたが、2002年頃をピークに漸減³⁾してきている。また10代の自殺率は2000年以降おおむね横ばいとなってきたものの未だ死因の上位⁴⁾を占めている。これらは「健やか親子21(第2次)」⁵⁾でその対策が進められており、思春期保健においては「性と生」についての教育が求められている。しかし、

従来の専門家による講義中心の教育では人工妊娠中絶や性感染症が急増したという経緯があるため、それまでの教育方法に疑問が生じた。そこで児童・生徒たちが主体的に行動変容するような教育方法に関心⁶⁾が寄せられてきた。また、「思春期の若者が悩みを相談するのは、親でもなく、教師でもなく、生きる価値観を共有・共感することができる同性代の仲間である」⁷⁾という報告がある。これらのことから、学校教育の現場では思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーションを用いた性教育(以下、ピア活動)が注目されてき

ている。

ピア活動が我が国に取り入れられたのは1991年に高校生の思春期講座：性の意思決定能力を育てようが始まりである⁶⁾と報告されている。その後、2000年からの「健やか親子21（第1次）」で「同世代から知識を得るピア・エドゥケーター、ピアカウンセリングなどの思春期の子どもが主体となる取組みの推進」⁸⁾が政策として取り組まれてきた。2015年からの「健やか親子21（第2次）」では「ピアサポートの推進」⁹⁾を掲げており、ピアエドゥケーションからピアサポートという支援的な言葉に置換され、思春期保健の分野において活用されてきている。

ピア活動の先行研究では、ピア活動を受ける側を対象とした研究は多数みられ文献研究^{10,11)}も報告されている。しかし、ピアカウンセラーを対象とした研究は見られるものの、ピアカウンセラーの能力を評価した文献研究は見当たらず、ピア活動がピアカウンセラー自身に及ぼす影響を概観できていない現状がある。そこで、ピア活動がピアカウンセラー自身に及ぼす影響を文献研究により明らかにすることを目的とした。

研究方法

1. 文献検索方法

文献の検索は医学中央雑誌Web版（Ver.5）を用いて「ピアカウンセラー」「ピアエドゥケーション」「ピアサポート」「思春期」をキーワードにして2016年11月時点において全年で原著論文に限定し検索した。「ピアカウンセラー」で31件、「ピアエドゥケーション」で28件、「ピアサポート and 思春期」で4件であり、これらのうち重複したものを除くと55件であった。その中でピアカウンセラー養成講座に関する文献を除き、ピア活動が及ぼすピアカウンセラーへの影響について述べられている9件の原著論文を抽出した。そのうち量的研究2件については、調査項目が限定的であるため省くこととし、影響が詳述されている、表1に示す質的研究7件を対象文献とした。

2. 文献分析方法

本研究では、ブルームらの理論を活用したイリノイ大学医学教育開発センターから提案されている分類¹³⁾（以下、イリノイ大学医学教育開発センターの分類）を用いてピア活動がピアカウンセラーへ及ぼす影響について明らかにすることとした。この分類では、認知領域、情意領域、精神運動領域の3領域を更にそれぞれ3つの段階に分類しており、段階は低次の目標から高次の目標への仕分けしたもので単純なものから統合に至る順序性ないし内容的階層¹³⁾を表している（図1）。この内容的階層項目を本論文中では、レベル項目と表記する。

まず認知領域は、知識の習得と理解及び知的諸能力の発達に関する諸目標¹³⁾からなり、レベル項目には想起レベル、解釈レベル、問題解決レベルがある。想起レベルは、知識・概念・理論などを記憶することができる。解釈レベルは、知識の意味づけや理由が分かることと、解釈能力をもつことができる¹³⁾。また、原理に基づいた推理及び知識の限界の認識なども含まれる。問題解決レベルは、新しい問題を解決するために理解している知識を応用し複数のデータを分析したり統合したりできる¹³⁾段階へと進化していく。

次に情意領域は、興味、態度、価値観・習慣などの意志や情緒と正しい判断力や適応性の発達に関する諸目標¹³⁾からなり、レベル項目には、受入れレベル、反応レベル、内面化レベルがある。受入れレベルは、特定の条件・状況・現象あるいは問題に対する感受性をもつ。反応レベルは、刺激あるいは現象に対して反応し働きかける。内面化レベルは、様々な行動が信念や一貫性と安定性をもって望ましい態度で行われるようになる¹³⁾段階へと進化していく。

認知領域	情意領域	精神運動領域
想 起	受 入 れ	模 倣
解 釈	反 応	コントロール
問題解決	内 面 化	自 動 化

図1. イリノイ大学医学教育開発センターの分類

さらに精神運動領域は、神経と筋の協調を要する一連の行動群で、手先の各種技術ないし技能や運動技術ないし技能に関する諸目標¹³⁾からなる。レベル項目には、模倣レベル、コントロールレベル、自動化レベルがある。模倣レベルは、示された動作や知識を想起しながら行動できる。コントロールレベルは、自分で必要な動作を選択して行動できる¹³⁾。自動化レベルは、ほとんど意識することなく自然にそのことが適切にできるようになる。ピア活動で用いられる技能の1つにアクティブリスニングスキル¹³⁾がある。これは高村ら¹³⁾が提唱しているスキルであり、広くピア活動で活用されている。アクティブリスニングスキルとは、アイコンタクトといった基本的向き合い方、オープンクエスション、パラフレーズ、感情と向き合うスキル、要約するスキル、統合するスキルから成り立つコミュニケーション方法である。これらはピアカウンセラー養成講座などで感情と向き合うスキルとして講義・演習を通して学ぶものであり、この技能を使用した記述は精神運動領域に分けることとした。

以上のイリノイ大学医学教育開発センターの分類を用いて7文献の内容を検討した。

3. 操作的定義

思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーション活動（ピア活動）：

一対一あるいは対集団に対して、性の問題に正しく対処できるよう、仲間意識を持って思春期の若者の自覚、意思決定や問題解決の能力を高める活動とする。

ピアカウンセラー：

ピア活動により、カウンセリングを受ける相手自身が自分自身の問題に対して解決策を見出していくことをサポートする者とする。

結 果

対象文献の内容をイリノイ大学医学教育開発センターの分類を用いて検討した。結果、特に精神運動領域において活動回数による違いが顕著にあらわれた。このため活動回数で比較することとし、

抽出された文献を更に活動1回みの文献2件、活動2回以上の文献5件に分けた。

1. 対象文献の調査対象とピア活動の概要（表1）

1) ピア活動経験1回みの文献

田中ら¹⁴⁾は看護学生6名を対象にピア活動後、啓発活動を行って感じたこと・学んだことに関する自記式質問紙調査を行っていた。上田ら¹⁵⁾は5年一貫課程の看護学生11名を対象に、ピア活動後に活動体験について自記式質問紙調査を行っていた。

これらの文献の調査対象者は、ピア活動前に事前に1時間から6時間と短時間で養成されていた。

2) ピア活動経験2回以上の文献

栗田ら¹⁶⁾は短期大学の看護学生10名を対象に、ピア活動で学んだもの、ピア活動で得たもの、ピア活動による自己の変化という内容を半構成的グループ面接で調査していた。大槻ら¹⁷⁾は3年課程の看護学生11名を対象に1年余りのピア活動後、ピア活動を通しての学びピア活動がもたらした自己の変化、学びを生活の中でどのように活かしているかという内容を半構成的グループ面接で調査していた。弥永ら¹⁸⁾は短期大学の看護学生12名を対象に、ピア活動の中で最も心に残ったこと、ピア活動を通して性について最も大切だと思うこと、ピア活動前後で最も変わったことを自記式質問紙調査で調査していた。渡辺¹⁹⁾は看護学・心理学・医学・教育学生70名を対象にどういった経験によって成長したか、どのように成長したと感じたかを自記式質問紙調査し、3名に半構成的グループ面接で調査していた。篠崎ら²⁰⁾はピア活動経験のある看護学生10名を対象に、ピア活動がもたらした変化、ピア活動を通して得た学び、カウンセラーとしての自信喪失という内容に沿ってグループ面接で調査していた。

これらの文献の調査対象者は、一部記述のない文献を除いて、ピア活動前に事前に1か月間（計7時間）から半年間（計45時間）と時間をかけて養成されていた。

表 1. 対象文献の概要

著者	調査対象者	ピアカウンセラーの養成方法	ピア活動場所	ピア活動内容
田中ら, 2014	看護学 大学生 6名	・保健師による説明30分（エイズの発生动向や活動の実際） ・DVD視聴30分（HIV/エイズ）	所属大学	HIV 予防 / 啓発
上田ら, 2011	看護学 5年一貫課程 11名	・開業助産師による講義2時間（思春期性教育） ・母性看護学教員による講義4時間（ピアエデュケーション / 人間の性/セクシュアリティ） ・「ピアカウンセリングマニュアル（学生版）」の紹介	同地域の中学校	・性に関する知識 ・人生設計 ・人間関係
大槻ら, 2009	看護学 専門学生 10名	・自治体が主催するピアカウンセラー養成講座	ピアカウンセリング事業に参加する高校4校	・性に関する知識 ・性に関する行動
渡辺, 2009	看護 / 心理学ほか 大学生 / 短大生 / 専門学生 70名	・記述なし*	記述なし*	・性に関する知識 ・エイズ ・心理相談
栗田ら, 2007	看護学 短大生 10名	・群馬県思春期ピアカウンセラー養成セミナー（ベーシックコース）4日間 ・群馬県思春期ピアカウンセラー養成セミナー（フォローアップコース）2日間	所属大学 高等学校 女子高等学校	・性に関する知識 ・人生設計
篠崎ら, 2007	看護学 大学生 10名	・厚生労働省ピアカウンセリング研究班によるピア養成カリキュラムのモデルカリキュラム（3日間コース）	高等学校	・性に関する知識
弥永ら, 2004	看護学 短大生 12名	・エイズ・STD教育リーダー養成講座1ヵ月間 月3回コース 計7時間（エイズ・STDの基礎知識/他大学の活動紹介/今後の活動計画）	小～高校ロータリークラブ 定時制高校 工業高校 女子学園	・性感染症予防 ・エイズ

* 思春期保健領域でピア活動を実施している大学、短期大学、専門学校教員に調査依頼し、ピアカウンセラーに質問紙を配布する方法で調査を依頼されており、該当箇所の表記がみあたらない

2. イリノイ大学医学教育開発センターの分類の領域別・レベル項目別内容（表 2.3）

文献の結果を要約又は前後の文脈より意味合いが通じるよう補足し、3領域に分類し、ピア活動1回のみ、2回以上で分けて記述していく。

1) 認知領域

ピア活動1回のみ文献では、想起レベルにおいて「無関心な青少年の実態を知る」¹⁴⁾「性の知識が増加する」¹⁵⁾などの記述があった。解釈レベルでは、「関心を示した青少年の存在を知る」¹⁴⁾「正しい知識の習得の大切さを理解する」¹⁴⁾「性の知識の理解をする」¹⁵⁾などの記述がみられた。ピア活動1回のみ文献では最終レベルである問題解決レベルまでの記述はみられなかった。

ピア活動2回以上の文献では、想起レベルにおいて「視野が広がる」¹⁷⁾「知識が増える」^{17,19-20)}などの記述がみられた。解釈レベルでは「自分が知識を理解しなければ伝わらない」¹⁶⁾「生徒の現状を見て今の高校生に必要なことを認識する」¹⁹⁾などがあり、問題解決レベルでは「高校生の現実に合った避妊方法を考える」¹⁶⁾「性について自分で考えて行動する」¹⁸⁾「性について自分の意見を持つ」¹⁹⁾といった最終レベルまでの記述がみられた。しかし中には、解釈レベルで「知識を伝えることの難しさを知る」¹⁷⁾「プログラムの工夫が必要であると考え」²⁰⁾といった記述にとどまり、問題解決レベルまでの記述がみられない文献もあった。

2) 情意領域

ピア活動1回のみ文献では、受入れレベルにおいて「同世代が活動を行う意味を感じる」¹⁴⁾「相手の立場に立つことの大切さに気づく」¹⁵⁾などの記述がみられた。反応レベルでは、「エイズを身近な事柄として捉える」¹⁴⁾「自らのセクシュアリティの捉え方の変化に気づく」¹⁵⁾などの記述がみられた。しかし、両文献とも内面化レベルまでの記述はみられなかった。

ピア活動2回以上の文献では、受入れレベルにおいて「いろいろな人の意見を聞きそれぞれ考え方が違うことが分かる」¹⁶⁾「性に関する話に抵抗がなくなる」²⁰⁾といった記述がみられた。反応レベルでは「人と接することで自分の考えが広まる」¹⁷⁾「相手の言葉の裏にある気持ちを考えるようになる」²⁰⁾などの記述があり、内面化レベルでは、「自己決定の尊重をする」^{17,20)}「偏見を持ちにくくなる」¹⁹⁾「自分らしさとは何かを自覚する」¹⁶⁾といった最終レベルまでの記述が全ての文献¹⁶⁻²⁰⁾でみられた。

3) 精神運動領域

ピア活動1回のみ文献では、精神運動領域の全てのレベル項目において記述がみられなかった。

ピア活動2回以上の文献では、模倣レベルにお

いて「傾聴のスキルを使う」¹⁶⁾「自己決定を促せるように聴く」¹⁷⁾などの記述がみられた。コントロールレベルでは、「相手の反応に合わせて対応をする」¹⁷⁾「カウンセリング時に相手の自己決定を導き出すように聴く」¹⁹⁾などの記述がみられた。自動化レベルでは、「実習でクローズドクエストやパラフレーズを使用して話をすすめる」¹⁶⁾「友達と話している時に聞く姿勢をとる」²⁰⁾といった最終レベルまでの記述がみられた。一方でピア活動2回以上の文献において精神運動領域の全てのレベル項目において記述がみられない文献¹⁸⁾もあった。

考 察

本研究において、国内の7文献をイリノイ大学医学教育開発センターの分類を用い分析した結果より、明らかになったピア活動が及ぼすピアカウンセラーへの影響について考察する。

1. 認知領域

認知領域については、ピア活動1回のみではピア活動をする中で学んだ性の知識を、相手に分かりやすく伝えようと正しい知識の習得の大切さを理解するといった知識や対象を理解することが出

表2. ピア活動がピアエデュケーターに及ぼす影響 活動1回のみブルームの分類

領域 分類項目 著者 発表年	認知領域			情意領域			精神運動領域		
	想起	解釈	問題解決	受入れ	反応	内面化	模倣	コントロール	自動化
田中ら 2014	・無関心な青少年の実態を知る	・関心を示した青少年の存在を知る ・正しい知識の習得の大切さを理解する		・活動の肯定的受け止め ・同世代が活動を行う意味を感じる	・エイズを身近な事柄として捉える				
上田ら 2011	・性の知識が増加する	・性の知識の理解をする		・カウンセラーのスキルと役割に気づく ・相手の立場に立つことの大切さに気づく	・自らのセクシュアリティの捉え方の変化に気づく ・性意識の高まりを自覚する ・取り組みに対して自己達成感を得る				

表3. ピア活動がピアエデュケーターに及ぼす影響 活動2回以上のブルームの分類

領域 分類項目 著者 発表年 (活動回数)	認知領域			情意領域			精神運動領域		
	想起	解釈	問題解決	受入れ	反応	内面化	模倣	コントロール	自動化
栗田ら 2007 (2回)	・知識が増える	・自分が知識を理解しなければ伝わらないと考える	・ピアエデュケーションを達成するためにプログラムを工夫する ・高校生の現実合った避妊考	・自己理解をする ・いろいろな人の意見を聞きそれぞれ考え方が違うことが分かる	・自分にできる事に気づき自信になる ・他人の意見を聞き自分の意見を見つめ直す	・自分らしさとは何かを自覚する ・(多様な価値観を知り)他人の見方が変わる	・傾聴のスキルを使う	・自分の意見を明確に伝える	・実習でクラスクローエスチャールやパラフレを使用する ・話をすすめる
大槻ら 2009 (4回)	・視野が広がる ・知識が深まる	・知識を伝えることの難しさを知る		・人を尊重することは大切であると感じる ・自分が人から必要とされていることを実感する	・自分を好きになる ・人と接する事で自分の考えが広がる	・自己決定を尊重する ・個人を尊重する	・自己決定を促せるように聴く	・相手の反応に合わせて対応をする	・実習で患者さんに対して傾聴・共感な合う身につく
弥永ら 2004 (4回)	・正しい知識が増える	・正しい知識を持つことが大切だと理解する	・性について自分で考えて行動する	・命はかけがえないものと思える ・命の大切さを実感する	・多くの人に伝えたい気持ちが強くなる ・仲間と性について何ができる	・自分・相手を大切にし、思いやる			
渡辺 2009 (平均14か月)	・性に関する知識が増える	・生徒の現状をみて今の高校生に必要なことを認識する	・講座の内容や何を伝えたいのか話し合う ・性について自分の意見を持つ ・友人に正しい知識を広める	・自分と違う考えを受け入れる ・性を身近なもの考える ・人それぞれが価値観が違うのを素直に受け止める ・自分の嫌いな部分も受け入れる	・社会貢献したいと思うようになる ・自信がつく ・自分の態度が相手に与える影響を認識できる	・偏見を持ちにくくなる ・友達の意見をじっくりと聞けるようになる	・積極的傾聴などのスキルを使う	・ピア活動で意見を認められる ・カウンセリング時に相手の自己決定を導き出すように聴く	・相手の気持ちを受入れ相手問題解決能力・自己決定を引き出すようになる
篠崎ら 2007 (平均17か月)	・知識が増える	・知識の必要性が分かる ・プログラムの工夫が必要であると考える		・自分を見つめられるようになる ・性に関する話に抵抗がなくなる ・人それぞれいろいろ考えが良いと	・相手の言葉の裏にある気持ちを考えるようになる ・自分に足りなかつたことが分かるようになる	・自分の気持ちをオープンにできる ・自己決定の尊重をすすめる ・見目で判断しない自分ができる	・傾聴を試みる ・聴く姿勢がとれずうまくコミュニケーションがとれない	・沈黙は相手と考えている時間だと気づき待つようになる	・友達と話している時に聞く姿勢をとる ・日常生活でよく傾いて会話をすすめる

来るレベルまで到達すると考えられる。ピア活動2回以上では活動を通して知識が増えることでピア活動内容の理解を深め、精選し工夫をすること

によって生徒の現実に合った方法を考えるだけでなく、自分自身の性行動するについても考え、友人にも正しい知識を広めるなどの知識の応用に

至っていた。Kolb, D. A.²¹⁾ は、学習を「経験を変換することで知識を創り出すプロセス」と定義づけている。すなわち、経験そのものよりも、経験を解釈して、そこからどのような法則や教訓を得たかということ²¹⁾ である。今回の対象文献においても、ピア活動1回のみでの文献では、問題解決レベルまでの記述はなかったが、2回以上のピア活動を経験した者は、活動前に学んだ知識を活用し、更にピア経験を重ねることで得た経験知により、対象に適した方法を見出すことができるようになったと考えられる。

これらのことから、ピア活動を行うピアカウンセラーらは、ピア活動をすることで、認知領域において、知識を統合し、ピアカウンセラー自身の問題解決能力を高めるという好ましい影響が得られたものと考えられる。

しかし、ピア活動2回以上で問題解決レベルの記述の見られなかった文献では、「知識を伝えることの難しさを知る」¹⁷⁾「プログラムの工夫が必要であると考え」²⁰⁾ を挙げており、ピア活動がうまくいかなかったと自覚した場合、思考停止に陥り、問題解決レベルの知識の応用や分析、統合に至らなかったものと考えられる。

2. 情意領域

イリノイ大学医学教育開発センターの分類では、情意領域のレベルに受入れ（価値観の受容など）、反応（態度の方向性など）、内面化（望ましい態度の習慣化など）¹³⁾ の3レベルがある。高村ら¹³⁾ は、ピアカウンセラーがとるべき態度や姿勢として8つの誓約を守ることを提唱している。高村らの提唱する8つの誓約¹³⁾ とは、「カウンセリングにおいて①批判的にならない②共感を示す③個人的なアドバイスは与えない④詰問調にならない⑤カウンセラーが抱える問題の責任はとらない⑥解釈をしない⑦現状と現時点に視点を据える⑧感情と向き合い、感情について話し合う、」から成り立っている。ピアカウンセラーは養成過程で感情と向き合う方法として8つの誓約を講義・演習によりスキルを身につけていく。このためピアカウンセラーは、ピア活動1回のみにおいても、相手の感情に向き合うことで相手の立場に

立つことの大切さに気付き、性=生に関する健康問題を自分のこととして向き合うようになると考えられる。しかし1回のみでは相手の価値観や自己決定を尊重するという内面化レベルまで至らなかったものと考えられる。

一方、2回以上のピア活動の文献では、人それぞれ価値観が違うのを素直に受け止めることで、自分・相手を大切に、思いやるという対人関係に必要な配慮、調整などの内面化レベルにまで到達することができるようになると考えられる。

3. 精神運動領域

イリノイ大学医学教育開発センターの分類では、精神運動領域のレベルに模倣（動作の模倣など）、コントロール（動作の選択と操作など）、自動化（自然に適切な行動の実行など）¹³⁾ の3レベルがある。ピア活動経験1回のみでは精神運動領域の記述が見られず、ピア活動経験2回以上では、「実習で患者さんと向き合う時の距離や話し方を考える」¹⁷⁾、「友達と話している時に聞く姿勢をとる」²⁰⁾ など多くの文献で自動化レベルまで記述がされていた。Bateson, M. C.²²⁾ は『学習における経験の状況的性質の重要性について「複雑すぎて1回では把握できない学習は何度も何度もらせんを描き、小さな例が次第にだんだんと意味をなすようになってくる」「1回目にかろうじて理解できたことは、2回目は深い意味をもつだろう。そして3回目も』と説明している。このことから、複数回ピア活動を経験した方が、コミュニケーション技術が身に付き、日常生活においてもそれらのスキルを応用することができるのではないかと考えられる。また、Fred A. J. Korthagen²³⁾ は経験による学びの理想的なプロセスを「行為」「行為の振り返り」「本質的な諸相への気づき」「行為の選択肢の拡大」「試行」の5つの局面に分けるALACTモデルを提唱している。このプロセスをピア活動に当てはめるならば、①「Action（行為）」ではピア活動で「傾聴を試み」²⁰⁾、②「Looking back on the action（行為の振り返り）」では「うまくコミュニケーションがとれない」²⁰⁾ と活動した仲間とともに振り返りを行っている。その後③「Awareness of essential

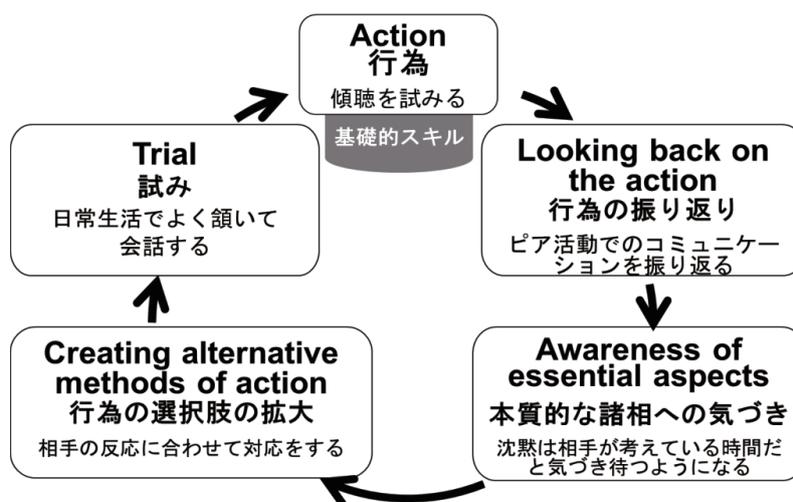


図2. ALACT モデル (学びの理想的なプロセス) にあてはめたピア活動での学びの一例

aspects (本質的な諸相への気づき)」では「沈黙は相手が考えている時間だと気づき待つようになる」²⁰⁾ 必要があったのではないかと気づく。そして、④「Creating alternative methods of action (行為の選択肢の拡大)」では「相手の反応に合わせて対応をする」¹⁷⁾ といったピアカウンセリングスキルの活用の拡大ができるようになる。その上で⑤「Trial (試み)」では「日常生活でよく傾いて会話をする」²⁰⁾ ことや「友達と話している時に聞く姿勢をとる」というようなプロセスを踏むこととなると考えられる (図2)。このように、ピアカウンセラーは5つの局面を通してピア活動の経験を積み積むほど成長し、進化していくことが考えられ、本研究においてもピア活動経験2回以上の者を対象とした文献に、経験による学びのプロセスがみられていると考えられる。

一方、ピア活動2回以上で精神運動領域の記述のなかった文献¹⁸⁾があった。この文献では、養成の時間数が短くピアカウンセリングスキルを学ぶ機会がなかったことが原因と考えられる。これは、本研究においてピアカウンセリングスキルで用いられる技術を精神運動領域に分類したため、それらに関連した記述がみられなかったものと考えられる。しかし、ピアカウンセリングスキルは相手の感情と向き合う上で必要なスキルであり、相手自身が自分自身で問題解決策を見出していくことをサポートするために事前に学ぶべきものであると考えられる。

結 論

思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーション活動がピアカウンセラー自身に及ぼす影響をイリノイ大学医学教育開発センターの分類を用いピア活動1回のみ文献と2回以上の文献でその内容を比較検討した。

- ・認知領域では、ピア活動が1回のみ文献で解釈レベルまで到達していたが、2回以上では問題解決レベルまで到達していた。
- ・情意領域では、1回のみ文献で反応レベルまで到達していたが、2回以上では内面化レベルまで到達していた。
- ・精神運動領域では、1回のみ文献で記述が見られず、2回以上では一部の文献を除き自動化レベルまで到達していた。

以上のことから、ピアカウンセラーはピア活動の経験回数を重ねることにより、知識、価値観、技術において深化するという影響が見られた。

文 献

- 1) 厚生労働省：衛生行政報告例の概況：
6. 母体保護関係 http://www.mhlw.go.jp/to_ukei/saikin/hw/eisei/08/di/data_006.pdf (参照日：2017.3.4.)
- 2) 厚生労働省：衛生行政報告例の概況：

6. 母体保護関係 http://www.mhlw.go.jp/to_ukei/saikin/hw/eisei_houkoku/14/dl/kekka6.pdf (参照日: 2017.3.4.)
- 3) 厚生労働省: 性感染症報告数 <http://www.go.jp/topics/2005/04/tp0411-1.html> (参照日: 2017.3.4.)
- 4) 厚生労働省: 平成28年版自殺対策白書, 9-12, 日経印刷, 東京, 2016
- 5) 厚生労働省: 「健やか親子21(第2次)について」 <http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/s2.pdf> (参照日: 2017.3.4)
- 6) 松本清一, 高村寿子: 性の自己決定能力を育てるピアカウンセリング, 20-36, 小学館, 東京, 2002
- 7) 萩野博, 西岡和夫: 思春期の人々のヘルスニーズ: WHO 専門委員会報告. 43-46, 日本公衆衛生協会, 東京, 1979.
- 8) 厚生労働省: 「健やか親子21」概要 - 母子保健の平成26年までの国民運動計 <http://www.mhlw.go.jp/file.jsp?id=147632&name=0000013645.pdf> (参照日: 2017.3.4)
- 9) 学童期・思春期から成人期に向けた保健対策(基盤課題B) <http://sukoyaka21.jp/pdf/dai5-2.pdf> (参照日: 2017.3.4.)
- 10) 友岡愛, 大野佳子, 池ノ上由貴ほか: 日本におけるピアカウンセリングが高校生の性の自己決定に及ぼす影響に関する文献検討, 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 19, 41-48, 2009
- 11) 宮内彩, 佐光恵子, 鈴木千春ほか: 思春期における性教育としてのピアエデュケーションに関する研究動向, 思春期学, 31(2), 243-251, 2013
- 12) 田島桂子: 看護教育評価の基礎と実際, 第1版, 43-50, 医学書院, 東京, 2001
- 13) 高村寿子, 堀内成子ほか: 思春期の性の健康を考えるピアカウンセリング・マニュアル ピアカウンセラー(学生)版, 14-47, 小学館, 東京, 2012
- 14) 田中 小百合, 松川 泰子, 徳重 あつ子: 看護学生が行った大学生へのエイズ啓発活動におけるピアエデュケーションの効果, 明治国際医療大学誌, 10, 15-18, 2014
- 15) 上田 伊佐子, 高木 彩, 川西 千恵美: 性のピアエデュケーションにエデュケーターとして参加した看護学生の体験と自己肯定意識の変化, JNI: The Journal of Nursing Investigation, 9 (2), 1-8, 2011
- 16) 栗田 佳江, 池田 優子, 杉原 喜代美ほか: 看護学生の思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーション活動を通じた学びと自己の変化グループインタビューの分析, 高崎健康福祉大学紀要, 6, 51-66, 2007
- 17) 大槻 弥生, 畑 吉節未: 思春期ピアカウンセリング活動参加体験の検討 看護学生がピアカウンセラーとして見たこと, 感じたこと, 日本看護学会論文集, 看護教育, 38, 359-361, 2008
- 18) 弥永 和美, 田中 千絵, 今村 桃子: 性感染症予防・ピアエデュケーションの意義と課題, 聖マリア学院紀要, 19, 55-58, 2004
- 19) 渡辺 純一: ピアサポート活動を実践する若者の成長に関する研究 思春期保健領域に焦点を当てて, 思春期学, 27 (1), 115-126, 2009
- 20) 篠崎悦子, 佐々木明子, 高村寿子: 思春期ピアカウンセラーの活動意義とピアカウンセリング活動の継続に必要な支えに関する研究, 思春期学, 25 (1), 157-166, 2007
- 21) 松尾睦: 経験からの学習 プロフェッショナルの成長プロセス, 62-63, 同文館, 東京, 2006
- 22) S.B.Merriam, R.S. Caffarella 著, 立田慶裕, 三輪健二監訳: 成人期の学習 理論と実践, 269, 鳳書房, 東京, 2005.
- 23) Fred A.J.Korthagen: 武田信子ほか訳, 教師教育学—理論と実践をつなぐリアリステック・アプローチ, 53-61, 学文社, 東京 2012

Literature research on the effect of adolescent peer counseling and peer education activities experience on peer counselors

Misato HATAKEYAMA¹⁾, Kyoko SASANO²⁾, Tomomi HASEGAWA²⁾

1) Toyamaken Saiseikai Takaoka Hospital

2) Department of Maternity Nursing Graduate School of Medicine and
Pharmaceutical Sciences, University of Toyama

Abstract

The purpose of this study was to describe how peer counselors are influenced by pubertal peer counseling or peer educational intervention, which was introduced in Japan in the 1990s. The key words are peer counselor, peer education, peer support, and puberty. As of 2016, these words were found in 55 studies in Medical Central Magazine database. Of these, seven were qualitative studies analyzing the educational influence of peer counselors. This literature was classified into three primary domains and three levels of Bloom's Taxonomy, developed by the Medical Education Development Center of the University of Illinois: (1) cognitive domain (recollecting, understanding, and problem-solving), (2) affective domain (accepting, reacting, and internalizing situations), and (3) psychomotor domain (imitating, control, and automating movements). While only one intervention model covered two domains, it did not achieve a high level (problem-solving, internalizing situation, au-tomating movements). On the other hand, most studies having more than two intervention models covered three domains and achieved a high level. One can infer from the above that knowledge, sense of values, and skills of peer counselors were influenced by interventions, and these effects led to an advanced practical experience.

Keywords

Puberty, peer counseling, documents study